



## DVD「医療用語を日本手話で ～医療従事者とろう通訳者の協働～」の制作に関わって その2：医学用語のDVD制作の監修にあたって

小松川医院 院長

た さき  
田 崎 ゆ き  
Yuki TASAKI

昨年夏に完成した「医療用語を日本手話で ～医療従事者とろう通訳者の協働～」というDVD。その作成に医療監修者の一人として参加した。そもそもの始まりは、2018年頃。以前、「医療現場での医療手話とは？」「ろう者に通じる手話表現は？」をテーマに、別団体でろう者に講演して貰ったことが何度かあるのだが、その頃からのメンバーの一人に、企画への誘いを受けた。実際の打ち合わせが始まったのは2019年春。医療監修者としてろう薬剤師1人、聴者の看護師1人に言語聴覚士1人に医師（私）1人の計4人。『病院の言葉を分かりやすく』\* という本をもとに、日本手話で医療用語を説明しようというもの。

この本のコンセプトはこうだ。医療者の話す言葉、書かれた用語が理解できないのは、馴染みのない専門化した医療用語が多いため。こうした「医療用語」と言われる範疇の言葉は、患者側にわかりやすく医療者が説明する義務がある、と。確かにそれは必要なことだと、外来でも日々痛感している。今では笑い話として語られる、「座薬」を「座って飲んだ」とか、「1日3回食間に服用」を「食事の間＝食事中に飲んだ」という話や、「貧血」と「脳貧血」の混同など、日常の聴者に対する診療でもよく遭遇する、意味の取り違い、思い違い。ましてろう者に対しては…というのは、私の手話表現の拙さが大きいとは思いますが、そもそも言語が違うので、日本語を手話単語に置き換えるだけでは通じない。日本語が分かりやすくなっても、日本手話として翻訳し、説明するとなると難航する。

と偉そうに書いているが、実は手話と出会ったのは父の跡を継いで小児科・内科の医院を開業して間もない頃。大学で「聴覚障害とは何か」は習ったが、ろう者や手話については全く知らなかった或る日、

1人のろう女性が来院。筆談を試みるも首を傾げられ、読めないのかなと漢字をひらがなにする愚挙で更に悩ませ、身振り手振りに…何とか診察を終えたものの、その四苦八苦たるや…で、手話通訳存在も知らなかった当時の私は、もし自分が手話できたらと思ったわけだ。ところが、手話を習い始めて数年後。初めてろう者と会って相手の手話が全く読み取れなかった時の衝撃！講習会で習っている手話とは違う、日本手話というものがある、と知ってからは日本手話を学び始めて今に至る。診察時に相手が繰り出す手話が読み取れないことには話にならないので、今も手話学習中。なのだがそれはともかく、その流れが先に書いたろうゲストによる講演会や、今回の企画に繋がっている。

さて、医療手話。外来の場では、手話だけでなく筆談や口型や果ては身振りも交え、1つ1つ確認しながら進めることも出来るが、手話通訳者はそうはいかない。外国語医療通訳に対しては様々な教材や研修もあるが、手話通訳ではその手のものは見られない。医療通訳に関する研修も殆どなく、手話通訳者は自己研鑽や現場での積み重ねで対応を覚えていく…という話も聞く。そんな悶々とした部分を打破するきっかけになるかも知れない、というのが、DVD作成の呼びかけにOKした理由だが、私自身、どんな表現になるか知りたかったというものもある。

企画に共感して打ち合わせを始めたものの、これが一筋縄ではいかない。実際の流れはこうなのだが、すんなり進んだのは①までという情けなさ。現実には厳しい。

- ①医療監修者が各自、本から用語をピックアップし最終的に用語を決める。
- ②4人が各々担当用語を決め、本の文章を手話表出しやすいよう変更、モトの文章を作る。

\*「病院の言葉を分かりやすく 工夫の提案」(国立国語研究所「病院の言葉」委員会著 2009年3月刊行)

- ③②をろう通訳者に送る…と、ここまではネット上でのやりとり。
- ④実際に集まり、ろう通訳者と話し合い変更しながら（当然だが手話で）、仮動画を撮る。
- ⑤撮った仮動画を見て検討すると共に、日本語文の変更も行う…のもネット上で。
- ⑥さらに⑤をもとに再度ろう通訳者が表出したものを、現場ですり合わせながら録画。
- ⑦②～⑥を19用語で行うと共に、実際の手話表出で変更になった日本語文の修正。

（説明文を冊子としてDVDにつけることになったので）

当初の予定では翌年＝昨年春くらいまでには終わるはずだった。ところが、翌2020年の年明けからご存じのように新型コロナが流行。完成予定の春を目前に、全国的な緊急事態宣言、ステイホームとなり、リアルでの話し合いや録画のため集まることが出来ず、中断したまま数か月経過。その後、窓開放＋ソーシャルディスタンスをとっても話が出来た手話との合わせ技で、やっと全てを録画し終えたのが7月中旬。というコロナ禍での大変さは仕方ないとして、思っていた通り大変だったのが④～⑥。その前の②も、実は相当に苦労した。

何しろ生まれつき日本語が第一言語。まず日本語を読み込んだ後で日本語をアタマから追い出し、実際に手を動かしながら文章を考え…ているつもりが、文章を考える時、脳内はどうしても（音声）日本語脳になって来る。そうでないと文章が書けないのだ。

ここは説明は要らないだろうと思っていた部分だが、実は説明や確認が必要だったこともまま。何より毎回「おー」だったのが、こちらの提示した日本語とのズレ。もちろんそれを想定しての、リアル会合の場での打ち合わせ、すり合わせではあったのだが、こちらの手話表現が追いつかず、微妙なニュアンスの説明が出来ない時もあり、誰か代わりに説明してーと他のメンバーに助けを求めたり、時に双方パソコン画面を使って確認し合ったり。

日本語文を全て「/」で単語を区切る手話文に書き換えたろう通訳者もいて、その書かれたものを見ると実にすんなりと手話になる…のだが、われわれ

聴者メンバーが作るのは無理な話。せめて少しでも分かりやすく、日本語の言い換えや単語の順番を変えたりするのが精いっぱいだった。それも当日ろう通訳者の修正が入るのが常で、がっかりしながらも「どう直して表現するんだろう」と楽しみでもあった。

例えば気管支と食道の分岐部。2本の管を前後に表現するCLは見てソレと判る。日本語では二重表現になりそうな部分を、NMM（非手指要素）でさらっと簡潔に表現されると、芸のない話だが毎回「おー」と感嘆。「がん細胞が増える」「がん細胞が減る」と言う時、細胞数の増減よりも「大きい/小さくなる」、且つ増減の程度、速度を手の速度やNMMで適格に表現したり。結果を最後に言う日本語と、比較的最初に結論を述べる手話の話し方との違いや絶妙な言い換えだったり…「おー」「なるほど」を連発してしまう。

そうした違いやズレを逐一手話ですり合わせながら変更しながら、細かな手直しを繰り返しながら、ろう通訳者は何度も手話表出してくれた。時には数時間に及び、集中が切れることもあった。これによし、と決まっても、録画中の表出ミスは当然ある。通常の会話では問題にならない些細なミスも、DVDにするとなればやり直しとなる。何度も撮り直して、今度はいける!と思っていた最後の最後で「あ!」となると、全員がっかり。申し訳ないというか気の毒というか、もうここ編集で何とかならないのーと思うことが何度もあった。

それでも目の前で繰り返される日本手話は、「その1」の記事で小林氏が書かれているようにNMMあり、CLあり、RSありで見とれてしまう。見とれている場合ではなく、細かくチェックをしなければいけないのだが、気がつけば見入ってしまい、何度も画面で再チェックしたり、巻き戻してはスローでチェックしたり。帰宅後もWeb上で動画チェックをし、元の日本語から変更された部分は書き直し…の繰り返し。文字通りの「協働」。四苦八苦しつても楽しく、もっともっと日本手話を頑張るぞーとヒソカナ決意を胸に、寝る前にDVDを見ながら手を動かしてみたりする。医療現場での様々な問題軽減にこのDVDが少しでも役立つといいなあと思いつつ。